

「きのこ雲」後方 串木野空襲の煙

串木野空襲の煙



大矢氏は「終戦直前まで日本全土に空襲が広がっていた」と話している。

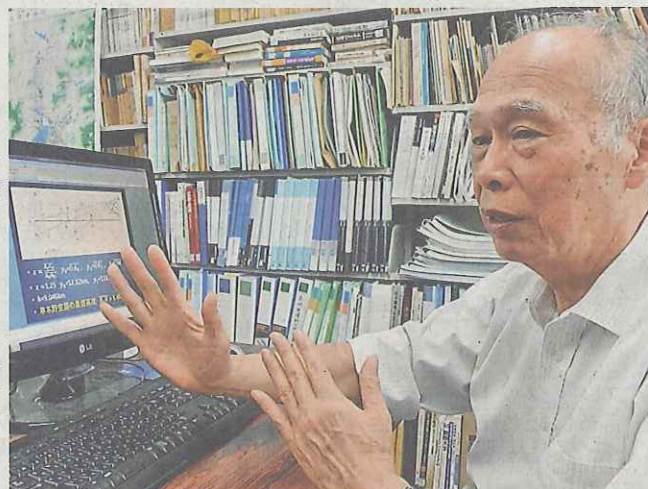
大矢氏らは2014年、米軍が長崎原爆投下直後に上空約9キロから「きのこ雲」を撮影した約3分間の映像を米スタンフォード大のフーバー研究所から入手。映像を活用し、きのこ雲を撮影した米爆撃機B29の飛行ルートを割り出した。

大矢氏らは研究過程で、きのこ雲の右後方に写り込んでいる小さな黒煙に着目した。当初は鹿児島・桜島の噴煙と推測したが、当時の気象記録では1945年の噴火は確認できなかった。

大矢氏と長崎大の学生チームは、きのこ雲後方に映る陸地の海岸線や島の形状を、米グーグルの衛星写真を利用したサービス「グーグルアース」のデータと照合。黒煙の発生場所は、長崎から直線

米軍機が長崎原爆の投下直後に撮影した「きのこ雲」の映像に、米軍が原爆投下の約1時間前に鹿児島西部の旧串木野町（現いちき串木野市）を空襲した際に発生した黒煙が、写り込んでいることが分かった。長崎総合科学大の大矢正人名誉教授らが特定した。

長崎大・大矢名誉教授ら特定



きのこ雲後方の黒煙が串木野空襲のもものと特定した大矢名誉教授
＝長崎市、長崎総合科学大

米軍が撮影した長崎原爆のきのこ雲の写真。きのこ雲の右奥に串木野空襲の黒煙が見える（長崎原爆資料館所蔵）

「終戦直前まで全土に空襲」

距離で約110キロ南東の旧串木野町付近と突き止めた。

大矢氏らは串木野の記録を調査。「串木野驛史」によると、45年8月9日午前10時8分以降、米軍機計39機が串木野に空襲し、機銃掃射や焼夷弾で攻撃していた。入手した米軍の報告書にも、同日午前10時5分から10分間、串木野を空襲し、米軍機パイロットが空襲後に約1・8キロ上空まで立ち上る煙を確認したことが記されていた。

大矢氏らがグーグルアースを用いて映像を分析した結果、串木野空襲の黒煙は、原爆投下時刻の午前11時過ぎに約3・4キロ上空まで達していたと推定された。これらの調査結果を総合的に判断し、きのこ雲後方の黒煙は串木野空襲により発生したものと特定した。

大矢氏によると、連合軍は日本が降伏しなかった場合、11月に九州南部から上陸する作戦を計画しており、同地域沿岸部の制圧が必要だったため、作戦前に串木野も空襲したとみられるという。

大矢氏は「全国各地の空襲体験と原爆被害を関連づけて、平和の大切さを伝えていく視点が今後は重要になる」と話している。

(手島聡志)